

# 特設講座「国際協力とジェンダー」

荻原 万紀子・菊池 美千世・田中 京子

## 授業の目的と概要

今日、世界の各地で紛争や貧困などの問題が絶えず、特に女性が困難な状況に置かれることが多い。本講座は、そうした実態を学び解決に向けての協力について考えることを目的として、数年来実施してきた「ジェンダーフリーを学ぶ」を改訂して開設したものである。同時に、本年度お茶の水女子大学に設置された「子ども発達教育研究センター」のプロジェクトとして、大学教員をまじえた高大連携の研究の一端としても位置付けている。来年度以降の「総合的な学習の時間」を視野に入れて、大学教員等の専門的な講義から触発された生徒が、自分の課題を設定して取り組んでいくことを目指している。

**対 象** 2年生選択者9名

## 本時の授業計画

1時間目に波平恵美子教授（本学ジェンダー研究センター長）による講義「国際協力の視点——医療協力とジェンダー——」を受け、それを踏まえ2時間目に生徒たちに話し合いをさせる。生徒の疑問や関心を引き出しながら3人の教諭がティームティーチングを行う。

## 授業の流れ

1時間目は予定通り進んだ。最初に「援助・開発と医療援助の関係」について歴史的な流れを踏まえての説明、ついで「身体」と「文化」は密接に関わっており、現地の文化を踏まえた上での医療活動が必要であること、最後に「ジェンダー化された身体」として女性・男性の「身体」に対する人々の意識も文化に根ざしたものであり、容易には抜きがたい固定観念であるとして、女性に対する医療協力の姿について述べられた。大変に深く高度な内容を波平教授はコンパクトにまとめられ、50分で話を収められた。

2時間目にまず疑問点を確認してから話し合いに移ろうとしたところ、疑問ことに「ジェンダー化された身体」が相当にわかりづらいという生徒があり、波平教授はその説明を写真も交えて懇切にされた。その結果、話し合いの時間はないまま時間がたち、最後に感想だけを述べさせて終わることとなった。

## 研究協議・反省

生徒の話し合いの時間が結局取れず、自主的な活動に導けなかったことが最大の反省であり、研究協議でもその指摘がなされた。通常1時間（50分）の授業では、講義の後に話し合いの時間を取る余地はなく、2時間続きにした今回の授業への期待は大きかった。しかし、2時間続きにしてもこの問題は解消されなかったわけで、どのような授業形態をつくるべきか、おおいに反省させられた。一方で、このような授業の取組みはまさに今日的であり、女子校として最適のものであるというご意見もいただいた。

どのような形態の授業にするか、生徒の意見も取り入れながらより有効なものを模索していきたい。